

前回は、ミツと吉岡のそれぞれの人生でおこった出来事、そしてふたりの再会についてみていきました。『ぼくの手記』(四)～(六)では特に、男としての性的欲望にとらわれて行動する吉岡の姿が書かれていました。男のずるさ・醜さにうんざりした女性や、彼の中に自分を見る思いがした男性もいたことでしょう。では、私たち人間の異性を求める性的衝動(性欲)は、〈けがらわしく・みにくく・暗い〉ものなののでしょうか？

きょうからしばらく、神さまが私たち〈人間〉をどうやってお創りになり、さらに〈男〉と〈女〉としたのはなぜか ― を旧約聖書の『創世記』から学んでいこうと思います。

《存在への問い》

みなさんは、「私のいのちは、どこからきたのだろうか？」(いのちの起源)、「私は何のために生きているのだろうか？」(人生の目的)、「この世のいのちが消滅するとき、私はどこに行くのだろうか？」(いのちのゆくえ) … など、自分の〈いのち〉や〈人生〉について何度も考えたことがあると思います。これらの問いは、人間が地球上に現れてからずっと考え続けてきた問いでもあります。そこから〈哲学〉・〈倫理学〉・〈宗教〉、そして〈人類学〉・〈心理学〉・〈社会学〉… といった、人間や世界を理解するためのさまざまな学問が生まれてきたわけです。この問いは、私たちにとって《永遠の問い》と言ってもいいかもしれません。

わたしが高校時代、いちばん好きだった教科は『倫理』でした。高2だったと思います。古代ギリシャのソクラテス・プラトン・アリストテレスの哲学からはじまって、孔子・孟子・老子などの中国の思想家の考え、キリスト教・イスラム教・仏教の世界三大宗教の教え…。そこには〈いのち〉や〈人生〉に関する根本的な問題についてのさまざまな〈答〉がありました。それまでの勉強のほとんどが〈一つしかない正解〉を求める学びだったことに気づきました。《いくつもの答》が用意されていて、《その答は人生の中で、自分でさがし出していく》教科があった ― というよろこびを感じました。わたしにとって、こんな魅力的な教科は他にありませんでした。週1回、50分の授業が10分か20分に感じられたのを覚えています。(哲学・神学の道に進んだら、浪人せんでもよかったかもしれへんな…。)

《天地創造》

神による天地の創造について、そして人間の〈いのち〉はどのように誕生したのかをみていきましょう。キリスト教では、すべて存在するものは**〈神の創造物〉**である ― と説いています。『旧約聖書』の『創世記』を読んでいきましょう。

【『創世記』第1章 1~5】

『初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面(おもて)にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。

「光あれ。」

こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。……』

神さまはまず、〈光〉と〈闇〉を創りました。第1日です。そして、2日目に〈大空(天)〉を、3日目に〈陸地〉と〈植物〉を、4日目に〈太陽〉・〈月〉・〈星〉を、5日目に〈空と海の動物〉を、6日目に〈陸の動物〉と〈人間(男と女)〉を創造され、7日目に仕事を仕上げ、安息された……と、書いてあります。(6日目の人間の創造部分は、次回詳しく書きます。)

もうこのあたりで、「おれ、ついていけないよ」「こんなこと、ありっこないよ」「あなたたちクリスチャンは、これだけ科学が発達した今の世の中で、これを本当に信じているの?」…と感じたり、疑問を抱いた方、さらには反発心をもった方がいらっしゃるかもしれません。お気持ちはよ〜くわかります。かつて、わたしもそうでしたから。

私たちがキリスト教に〈つまづく〉代表的な箇所は、『旧約聖書』のいちばん初めに書かれたこの《天地創造》の物語と、『新約聖書』におけるイエスの《奇跡物語》ではないかと思えます。なぜかといえば、科学が飛躍的に発達した現代に生きるわたしたちにとって、神による天地創造やイエスが起こした数々の奇跡は、〈受け入れがたい〉出来事だからです。

《科学と聖書》

多くの人たちが聖書を読む場合、科学がもたらした成果と聖書の記述との関係が問題になります。科学と聖書が矛盾しないことを説明しない限り、現代人にとって聖書はただの荒唐無稽な神話になってしまいます。夏期神学講習会で何度もお話を聞く機会があった片山はるひ先生(上智大学)は著作の中で、16世紀の科学者コペルニクス、ケプラー、ガリレオを例に科学者が『聖書』をどう受けとめていたかを語っています。

みなさんご存知のように、これらの科学者の発見はそれまで聖書が示していた世界像を180度転換させました。『コペルニクスが『天球の回転について』を発表した1543年、いわゆる天動説から地動説への転換がなされたのでした。ここで忘れてならないのは、これらの科学者たちが非常に深い信仰を持った人たちであった点です。実際コペルニクスはカトリック司祭でした』。

彼は地動説を発表する前、どれほど苦悩・葛藤して〈人生を賭けた決断〉をしたことでしょうか。カトリック司祭でありながら、それまでの教会の教えをひっくり返したのですから。また、「それでも地球は回っている」と彼を支持した『ガリレオ・ガリレイが弁明したかったのは、まさに自然科学上の真理と聖書の教えは両立するということ』だったといえます。

まったく相容れないと思われる科学と宗教が、なぜ〈両立する〉のでしょうか。片山先生は、『昔から多くの神学者が指摘するように、神が2冊の本すなわち『聖書』と『自然』を人間にお与えになったのであれば、同じ著者の手になるこの2冊は矛盾しないはずで、聖書と自然科学は、それぞれ世界と人間の理解のために補い合う要素を提供するものとするのが適当でしょう』。さらに、『創世記は、地球がどのようにして今の状態に

なっただかを描写する自然科学の本ではなく、「人間とは何か」「人間と神との関係は何か」「死と苦悩の意味とは何か」といった根本的な問題について、文学的宗教的伝統を用いて物語の形で答えを与えようとする本であり、『聖書は文学であり、しかも古典文学である』という基本的な事実を忘れてはいけない』とおっしゃっています。

また、『聖書はそれだけで、1冊の図書館であるとも言われますが、旧・新約聖書を通して、ありとあらゆる文学手法がその中に網羅されて』いると書いています。それではどんな〈文学類型〉がみられるのでしょうか。そこには〈物語（神話）〉、〈原初史〉、〈父祖伝承〉、〈歴史書〉、〈預言書〉、〈黙示（歴史と宇宙万物の奥義に関する解き明かし）文学〉など、まさに図書館といえる内容が盛り込まれています。

話を『創世記』に戻します。旧約聖書のいちばん最初にある『創世記』は、古代人の《神話》であり、現在の自然科学の考え方とはちがいます。「神話？… じゃあ、やっぱりまったくデタラメじゃないか」と思った方が多いと思います。

《「神話」とは何か》

では、「神話」とは何でしょう。『広辞苑』『大辞泉』『新明解』の3冊の中で、この言葉についていちばんまとまっていて、わかりやすい『新明解』から引いて見ます。

『①天地の創造を擬人的に説明し、森羅万象に宿る霊の存在や、民族の祖神の活躍を述べる物語。（古代人、未開社会人の間では、骨肉間の結合を固めるために絶対必要なものとして疑われなかった） ②かつて（長い間）絶対と信じられ、驚異的とさえなっていた事柄。（多く、現在は俗信に過ぎないという観点で用いられる）』

みなさんが「何の根拠もなく、デタラメだ」と思う理由は、上述の②の「俗信に過ぎない」という観点からでしょう。わたしが『新明解』を取り上げたのは、文中に『物語』・『骨肉間の結合を固めるために絶対必要なもの』という言葉があったからです。

『創世記』が書かれた時期は、この『塾』の第12回でご紹介したバビロン捕囚の頃でした。民族のプライドがズタズタに切り裂かれ、自分たちを守ってくれると信じていた神への信仰が揺れ動いていたときでした。絶望の中にあつた人々は自分たちの国を再建し、神への信仰を取り戻すためには、一致団結する必要があつたのです。〈創造〉について語るこのテキストは、人々が現状を打開し、『骨肉間の結合を固め』て、ユダヤ民族として未来を切り拓こうという祈りがこめられたものなのです。

どの民族の創生物語も、「神話」という文学形態をとっています。わたしたちの住む「日本」という国は、『古事記』にその誕生の経過が書かれています。『世界ができたそもそものはじめ。まず天と地ができあがりますと、それといっしょにわれわれ日本人のいちばんご先祖の、天御中主神（あめのみなかぬしのかみ）とおっしゃる神さまが、天の上の高天原（たかまのはら）にお生まれになりました。…』から始まって、伊弉諾神（いざなぎのかみ）と伊弉冉神（いざなみのかみ）による日本誕生の物語が語られます。

哲学や自然科学が示す世界の起源や現象、その原因の定義・説明があります。しかしそれは、人間が発する〈根源的な問い〉に対して十分満足できる答えでしょうか。

今回は、天地創造や人間の誕生についての話の続きと、男女の性をもつ意義について考えていこうと思います。

【引用・参考にした書籍】 ・片山はるひ『**聖書と信仰生活 — 育てるという視点から**』 佐久間 勤 編著『**神の知恵（ソフィア）と信仰 — 現代に生きる信仰者のための視点**』（サンパウロ、2005）より

・日本聖書協会『**聖書 新共同訳**』 ・鈴木三重吉『**古事記物語**』（EX-word 『日本文学 1000 作品』より） ・山田忠雄 他『**新明解国語辞典 第七版**』